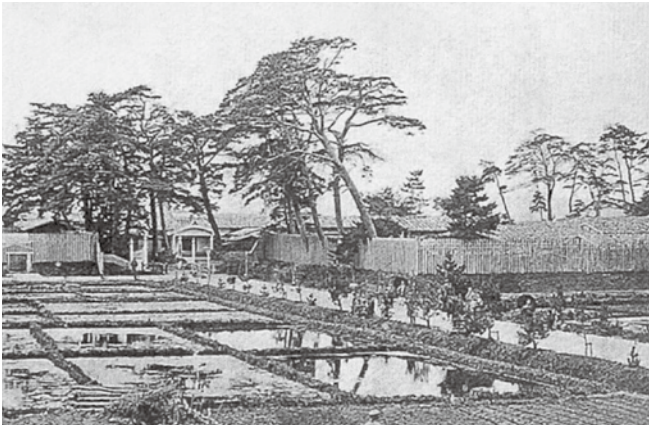


県都「誕生」への道のり

【問合せ】
市史編さん室 ☎ 017-732-5271

青森町は、藩政時代、今から340年ほど前に誕生した町で、湊を町の中心に据え、農業に従事しない「町人」層による町づくりが構想されました。実際、青森町には弘前のような武家屋敷はありません。



【写真①】御仮屋に置かれた県庁（青森県史編さん資料）

ですから、明治4年（1871）に突然「県庁」という大きな行政組織がこの町にやってくることは、藩政時代の町のあり方に対して大変革がなされたこととなります。

ただ、県庁が移転してくる少し前から、青森町にはこれまでになかった変化がみられるようになってきます。

今回は、箱館戦争が終結した後、明治2年の後半期から県庁移転に至る道のりをたどってみることにしましょう。

御仮屋の改築

明治2年11月末、弘前から工事作業のための人々がやってきます。弘前藩の出先機関で、藩主の宿泊所として使われていた御仮屋（現青森県庁）を増築するための工事が始まりました。そして、3月から9月までここに藩主が滞在し、家臣たちも一軒の規模で青森町にやってくるようになるだろうと予想されました。

さらに、藩主が半年ほどでも青森に滞在するようになると、青森の町も賑わうだろうと人々に期待されました。工事は翌年まで続き、外堀も整備され二重になったようです。写真①は、御仮屋を使って開庁した青森県庁ですが、藩政時代そのままのものではなく、こうした改築を経た姿であったようです。

道路や町並みの整備

さらに、青森町の振興策として、新城村から青森町へと結ぶ道路の開削が企画されます（石神野新道）。これまでに新城方面からの物資は油川村を経由して青森に運ばれてきましたが、この道路によって新城方面からの物資が直接青森に入ってくることになり、青森町での物価の安定が期待されました。また、沿道には人家が少なかったため、新しい村の開発も同時に計画されました。この時に開発され成立したのが江渡村で、後に石神村と合併し「石江村」となります。

このほかにも、衰退していた塩町（写真②）や、堤川周辺にも手がつけられました。特に、堤川の東側では、青森町に編入するために茶屋町村の一部を見分し、ここに料理屋や遊女屋などを建設することが検討されました。さらに、新しい町立てを行って、原別村までを青森町から「町続キ」にしよ



【写真②】明治初年の塩町（『目で見る青森の歴史』）

うという、壮大な計画が立てられます。また、浜町にはいくつかの役所も置かれ、ちよつとした官庁街のようになります。

たとえば、かつての町奉行所（ワシントンホテル北側）には民事局が置かれ、中浜町の湊番所（さんふり横丁の西側）には財務一般を扱う会計局、さらには、藩と領内の商人とが出資して成立した青森商社もこの近くにありました。ただ、青森商社以外は場所が一定せず、青森町の人々は戸惑っていたようです。そうはいつても、一方では何かが変わり始めた、人々は感じ取っていたことでしょう。



【写真③】仮の「藩庁」となった蓮心寺

政治・行政の町に

明治3年8月27日、青森町に滞在中の藩主津軽承昭は、町民へ金二千両と玄米三百俵を下賜しました。そして、これから青森町を新たに開発し、藩庁（藩主が政務を執った役所）も置くという考えを表明します。

藩政時代に誕生した青森町は、明治の「御一新」と呼ばれる改革の時期に再び藩主導のもとで新しい町づくりが企画されます。それは、藩政時代の町人の町に加えて、政治・行政の町へと生まれ変わろうとするものでした。

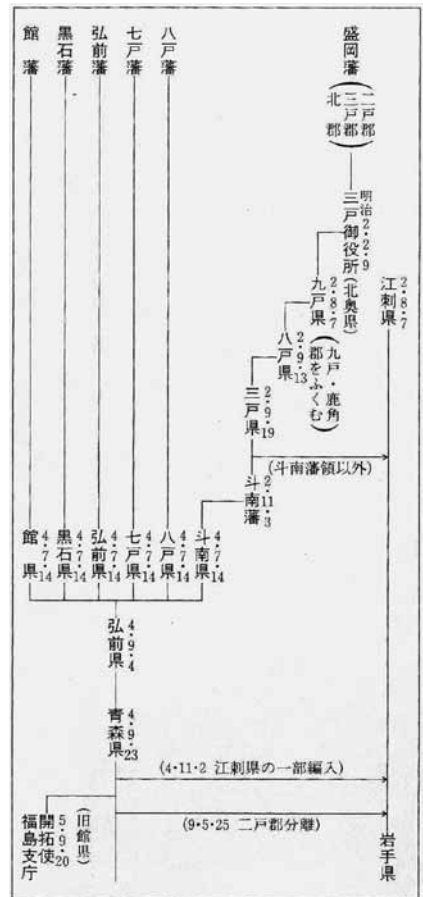
仮の「藩庁」は蓮心寺に置かれ（写真③）、藩主の居宅が完成後、御仮屋に移す予定でした。

ただ、10月に承昭が弘前に帰ってしまふと、仕事がなくなってしまう、12月22日から蓮心寺の藩庁では役人の出勤が停止されます。年が明けてやるべき仕事が増えたら再開するとのことでした。したがって、青森町の藩庁は、実質的な機能というよりも、青森町が政治・行政の面で重要な場所なのだということを示すポーズであったと思われまふ。

藩主の居宅は、すでに開発が検討されていた茶屋町村に建てられることになる。囁かれ、しかも、堤川周辺の農家を立ち退かせて、家臣三、四百軒の家を建てるのが企画されたそうです。飽和状態にある青森町には、もはや弘前からやってくる役人を受け容れることができず、新たに東側に官舎を造成することにされたのでしよう。しかし、こうした弘前藩の目論見は、実を結ぶことはありませんでした。というのは、明治政府によって藩体制そのものが否定されたからです。

県都青森の誕生

明治4年7月、明治政府は廃藩置県を断行します。廃藩置県とは、弘前藩が弘前県となったように、これまで全国にあった藩を廃止して、それを府もしくは県に統一するという制度の改革です。



【図①】青森県の成立

(小岩信竹ほか『青森県の歴史』山川出版社による)

その後、9月4日に太政官は、斗南県・八戸県・七戸県・黒石県、そして北海道の館県を弘前県に合県する令達を出しました。ここに新しい弘前県が誕生し、県庁は弘前に置かれることになりました。この時の弘前県は、現在の青森県のほか、北海道南部と岩手県北部の一部を含むとても大きな領域となります（図①）。

翌9月5日、元熊本藩士の野田豁通が弘前県権大参事に任命されました。実は、野田は箱館戦争以来この地域との結びつきが深く、青森町との関わりでいえば、この戦争中に青森口全軍會計総括を命じられ、政府軍の武器や弾薬、軍需品の調達などに忙しく働いていました。ですから、その当時から弘前藩の重臣のほか、青森・弘前の豪商たちとも親交があったようです。

ちなみに、彼は箱館戦争の終結後の

明治2年7月4日、青森町でねぶたを見物しています。

このような背景があったので、野田はこの地域の人々の気質や、問題点をよく知っていたのです。そこで、弘前着任前に県庁を青森に移転するメリットを説き、大蔵省に提案しています。この提案が聞き入れられたためか、定かではありませんが、ともかくも政府は9月23日に、県庁を青森町に移し、県名も青森県に変更すると令達し、ここに「県都青森」が誕生したのです。県庁は、改築が成ったばかりの御仮屋を庁舎とし（写真①）、12月1日に開庁することになりました。そして、以後140年以上にわたり、青森町（市）は青森県の政治・行政の中心にあり続けているのです。

（市史編さん室）